

アキタクロナガオサムシをめぐって

黒 沢 良 彦

日本産のオサムシの1種、*Carabus porrecticollis* BATES, 1883にアキタクロナガオサムシと云う和名が付けられたのは、原記載¹⁾が発表されてから50年も経た1933年のことで、命名者は戸沢信義氏である²⁾。

戸沢氏は *porrecticollis* BATES (*porrecticollis* の誤記) をクロナガオサムシ *Carabus procerulus* CHAUDOIR の変種として扱い、「原種は浦佐? 酒田(秋田県の海岸)にて捕へられたり、甚だ地方的に限定せられたる種にして、著者のこれに用いたるものは山形県産の標本なり。」と述べている。この戸沢氏の記述から推定すれば、氏は酒田を秋田県にあるものと信じて、和名をアキタクロナガオサムシとされたものと思われる。しかし、実際には酒田は秋田と同じ羽後の国に属してはいるが、当時も現在と同様に山形県に属し秋田県ではなかった。全くお粗末な話ではあるが、BATES の原記載に出て来る産地は、“Urasa, and on the north-west coast at Akita and Sakata; a local species.” と述べら

れてあり、秋田が出て来ないわけではない。戸沢氏の時代には標本のラベルに県名に代って国名が用いられることが多かったから、同じ羽後の国に属する秋田と酒田を思わず秋田県酒田と感違いたのかも知れない。戸沢氏は Urasa を正しく浦佐としながらも、それがどこにあるか判らず、浦佐? としているが、これは現在の新潟県南魚沼郡大和町浦佐のことで、G. LEWIS がこの地で採集をしたのは1881年9月19日のことである。また、秋田や酒田で採集をしたのは G. LEWIS 自身ではなく、彼の採集人をしてた日本人で、1880年9月19日から10月29日に至る間である。BATES の原記載の中に出て来る *porrecticollis* の産地の中で確実と思われるのは浦佐だけで、Urasa 以後の記述はひどく曖昧となる。“On the north-west coast at Akita and Sakata” は「秋田と酒田の北西海岸で」と解されるが、両地に共通した北西海岸を地図上に求めることは不可能で、強いて求めれば、男鹿半島の海岸あたりになるが、男鹿半島は酒田の真北に位置し、

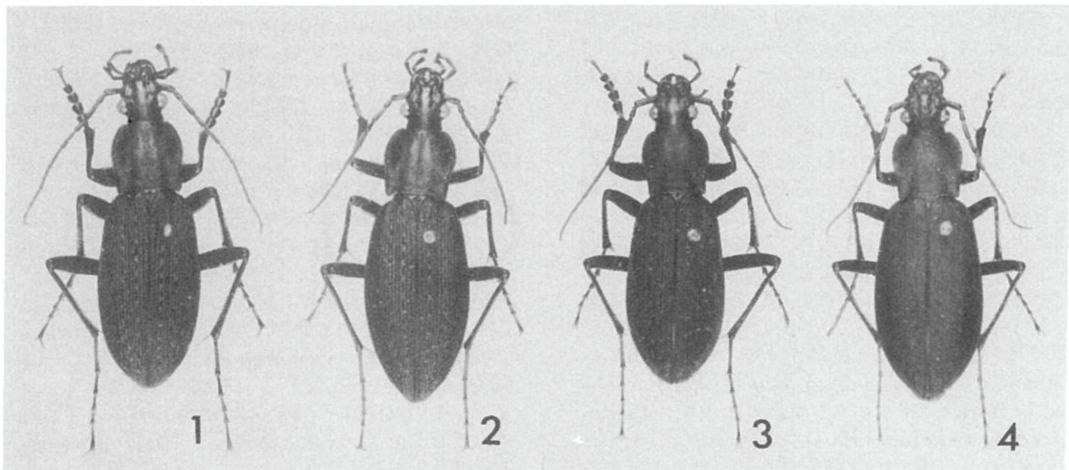


図 1~2 アキタクロナガオサムシ, 1: ♂, 福島県大沼郡新鶴村入田沢, 2: ♀, 福島県大沼郡新鶴村出戸田沢.

図 3~4 トウホククロナガオサムシ, 3: ♂, 福島県会津若松市飯盛山, 4: ♀, 福島県会津若松市青木山(奴田山).

北西ではない。また、酒田の北西海岸も秋田の北西海岸も共に海岸の砂丘地で、とても *porrecticollis* が棲めるような環境ではない。恐らく、LEWIS の採集人が本種を採集したのは秋田平野や庄内平野の周辺の丘陵地で、季節的に見れば朽木中に越冬中のものであったであろう。BATES は LEWIS からの報告を上記のように誤ったのではなかろうか。結局、本種のもっとも確かな産地は新潟県の浦佐だけである。この点については、大英博物館にある基準標本を見れば済むことであるが、1973年に同館を訪れた折に確かめておかなかったことが悔まれる。

戸沢氏の記述にはもう一つ疑問点がある。それは、戸沢氏が *porrecticollis* と信じておられたものは、現在われわれがトウホククロナガオサムシ *Leptocarabus (Adelocarabus) arboreus parexilis* (NAKANE) としている種類の細形の個体ではなかったかと云うことである。当時、関西には戸沢氏の流れを受けた多くのオサムシ愛好家が輩出したが、その全部が現在われわれが *porrecticollis* の金剛山脈の亜種 *kansaiensis* (NAKANE) としているものをホソオサムシ *Carabus tenuiformis* BATES とし、クロナガオサムシとは別種として扱っていたのに、*porrecticollis* はクロナガオサムシの亜種扱いにし、独立種とは見做していなかった。また、*porrecticollis* の産地は山形県内では極めて限られていて、私の知る限りでは内陸地方には見当らなく、標本を関西に送り得る採集者もいなかった。恐らく、戸沢氏は山形県産のトウホククロナガオサムシを *porrecticollis* と誤認された上に、酒田市が羽後の国にあるので、秋田県であると早断されて、*porrecticollis* にアキタクロナガオサムシと命名すると云う二重の誤りを犯されたものであろう。トウホククロナガオサムシをクロナガオサムシの亜種(=変種)と考えるのは、当時としては無理からぬことであるが、*porrecticollis* をクロナガオサムシの亜種と考えることは、当時でも躊躇されたであろう。因みに、当時の標本のラベルには県名よりはむしろ国名を用いる方が多かった。戸沢氏とは親友であった江崎梯三先生もラベルには国名を用いられていたので、九大の戦前の標本のラベルはすべて国名であった。ラベルが国名で記されてあると、国が2県に分割されている場合に所属県名を知るには地図を調べなければならないと云う不便さがある。福岡県英彦山も大分県宇佐もラベルでは共に豊前の国で、県が異なることを知ることは不可能である。

お恥かしいことではあるが、関西の愛好家から教えられて、私も同様の誤りを犯している。私が山形県米沢市から記録した³⁾アキタクロナガオサムシ *Carabus (Leptocarabus) procerulus porrecticollis* BATES はトウホククロナガオサムシ *Leptocarabus (Adelocarabus) arboreus parexilis* (NAKANE) の雄の細形の個体を誤ったものであるで、この機会に訂正しておく。*Porrecticollis* も戸沢流に *porrecticollis* と誤記してある。私は戦

前米沢市で約20年を過したが、同地で真の *porrecticollis* を見たことはない。同様に、私が同時に記録した、オオアカガネオサムシ *Carabus (Ohomopterus) vanvollexemi* PUTZEYS もアオオサムシ *Carabus (Ohomopterus) insulicola insulicola* CHAUDOIR の銅色個体の誤りで、真のホソアカガネオサムシ *Carabus (s. str.) vanvollexemi vanvollexemi* PUTZEYS ではない。これも戸沢氏の誤りがスベルの誤りごとそのまま引き継がれている。

なお、戸沢氏の「歩行虫の智識」1~4の中には珍妙な地名の誤記が多く、栃木県日光の女峰山は、女峯山はまだいいとしても、女法山になったり如法山になったりするし、青森県の岩木山に至っては、福島県岩城山になってしまっている。岩木山を岩城山としたことによって、岩代国(会津地方)と磐城国(阿武隈山地)の2国からなる福島県を連想し、この架空の山が出来上ったのであろう。

戸沢氏が「歩行虫の智識」1~4を書き上げた1933-1935年頃には、日本のオサムシ愛好家は戸沢氏の流れを汲む関西の愛好家に限られ、東京にさえほとんど愛好家がいなくて有様であった。従って、地方のオサムシ相についてはほとんど判っておらず、戸沢氏の解説も大阪地方が中心となり、本州から記載されたオサムシをすべて大阪周辺に見られる種類に無理に当てはめてしまったので、そのために惹起された誤りが随所に見られる。この誤りは、札幌に在った松村松年博士が日本から記載された種名を無理に北海道産の種類に当てはめてしまった誤りが、その後の日本の昆虫学に混乱を残した点によく似ている。これらの混乱は戦後主として中根猛彦君によって一挙に解消されたが、戸沢氏の残した和名上の混乱は上記のアキタクロナガオサムシの例の他にも若干そのまま残されて現在に至っている。たとえば、われわれが現在クロオサムシ *Carabus (Ohomopterus) albrechti* MORAWITZ としている種類は、体長17-26mmで小形、銅色で時に黒色、ごく稀に緑色のものが現れ、北海道と中部以北の本州に分布し、地方によっては銅色型ばかりで、黒色型や緑色型の全く現れない地方もある。しかし、戸沢氏がクロオサ *Carabus (Ohomopterus) albrechti* MORAWITZ と名付けたオサムシは、氏によると、「体長25-35mm、本州に産し、これは関西地方において最も普通なるものにて、多く平地の耕土に生活し、ミミズ、カタツムリ等を捕食す。」とあり、上記の現在のクロオサムシとは明らかに別種で、正しくは、現在われわれがヤコンオサムシ *Carabus (Ohomopterus) yaconius* BATES と称している種類の黒色型を指している。それでは真のヤコンオサムシを戸沢氏はどう扱っていたかを見ると、これには正しくヤコンオサと命名し、「これは *albrechti* の山地種とも称すべきものにて、本州に限られたる地方のみに産す。」と記してある。氏はヤコンオサムシの黒色型をクロオサとし、ヤコンオサにはミカ

ワオサムシを含む本州中部以西の銅色の大形の種類を含め、小形の銅色のものはすべてマヤサンオサ *Carabus (Ohomopterus) maiyasanus* BATES としていたものと思われる。戦後になって *albrechti* は本州の中部以北に分布する小形の種類であることがはっきりしたが、和名には戸沢氏の名付けたクロオサムシがそのまま生き残っている。この点で種 *albrechti* にクロオサムシと名付けるのは不適当で、他に適当な和名を考えるべきであり、アキタクロナガオサムシも同様である。

現在われわれがアキタクロナガオサムシ *Apotomopterus (Euleptocarabus) porrecticollis* (BATES) としている種類は、BATES がすでに100余年前に原記載の中で“a local species”と指摘している通り、日本産のオサムシ類の中では際立って局地的な分布を示す種類で、ある特定の地域の中ではそれほど稀でもないのに、その地域から一歩でも外に出るとびたりといなくなってしまうような奇妙な分布様式を持っている。その分布は、むしろ裏日本型とも云えるもので、秋田県より兵庫県に至る日本海側斜面の平野に面した丘陵地から低山地にかけて点々と産地が連続しているが、太平洋側の斜面になると、宮城県松島付近、栃木県栃木市付近、長野県伊那谷、愛知県段戸山付近、大阪府金剛山付近などきわめて限られた地域に例外的に見られるだけである。そのうちで、大阪府と奈良県にまたがる金剛山脈に産するものだけが亜種を異にするほどの特化を示していることは、金剛山脈のものももっとも早く隔離されて孤立したことを示し、その後本種全体の分布が北西に、日本海斜面に向けて縮小したことを示している。本種の分布を縮小させるだけでなく、極めて局地的にした原因が何であったかは判らない。しかし、本種が裏日本に分布を拡げた時代には、佐渡ヶ島はすでに本土から隔離されていたことは、本種が同島に産しないことから確実と思える。この点で、本種の分布は、甲虫ではないが、ギフチョウ *Luehdorfia japonica* LEECH の分布に

酷似している。青森県から福井県北部に至る日本海側斜面の丘陵地から山地に広く分布するが、脊梁山脈を越えて太平洋側に分布することのほとんどない、マガタマハンミョウ *Cicindela ovipennis* BATES の分布もアキタクロナガオサムシの分布に似て、同じ裏日本型に分類されるであろう。しかし、マガタマハンミョウは佐渡ヶ島に分布するのに、アキタクロナガオサムシは産しない点で、後者は新しい侵入者と云えるであろう。さらに、マガタマハンミョウは中国の雲南省を中心とする地方に近似種があり、アキタクロナガオサムシも中国の揚子江以南の山地と台湾に、亜属を異にしはするが、同属の多くの種類を産する点でも両者は似ている。

私がアキタクロナガオサムシを採集したのは、福島県大沼郡新鶴村佐賀瀬川付近の丘陵地で1948年3月25日に60頭を腐朽した切株中より得たのが最初である。その後、1948年より1950年にかけて新鶴村から喜多方市琴平山に至る会津盆地の西側の丘陵地にはほぼ連続的に分布するが、その南に続く高田町以南の山地には全く産せず、他の会津盆地周辺の山地にも全く産しないことを確かめた。写真には新鶴村入田沢産のアキタクロナガオサムシ♂と出戸田沢産の同種♀、会津若松市飯盛山産のトウホククロナガオサムシ♂と会津若松市青木山産の同種♀を示しておいた。

以上、アキタクロナガオサムシの和名を中心に思いついたことを記してみたが、冗長になり過ぎた嫌いがなくてもいい。

- 1) BATES, H.W., 1883. Supplement to the Geodephagous Coleoptera of Japan, chiefly from the collection of Mr. George Lewis, made during his second visit, from February, 1880 to September, 1881. *Trans. ent. Soc., London*, 1883 (3): 228.
- 2) 戸澤信義, 1933. 歩行虫の智識 (二), 関西昆虫雑誌, 1: 54.
- 3) 黒澤良彦, 1938. 南部米沢盆地に於けるオサムシ相. 昆虫界, 6: 867-869. (東京都世田谷区)

○*Micropeplus satoi* Y. WATANABE (ハネカクシ科) 隠岐に産す

Micropeplus satoi は、北海道三笠市幾春別を基準産地として記載されたチビハネカクシ (*Micropeplinae*) で、その後の採集例はないと思われる。筆者は下記の標本を持っているので記録しておきたい。本種は上翅に5縦隆条があることと、前胸背板の形状からほかのチビハネカクシ類とよくに区別することができる。

1頭、島根県隠岐知夫村, 14. v. 1983, A. MATSUO 採集 (写真)。

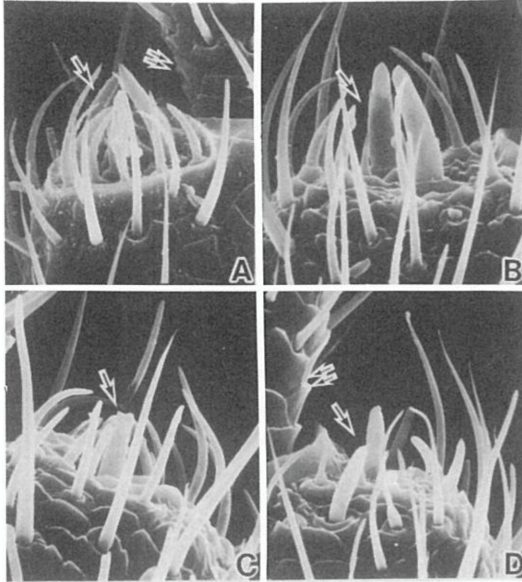
落葉下から得られたものである。標本をご恵与いただいた田中真悟氏に感謝したい。

(神奈川県小田原市, 平野幸彦)



○ミズギワコメツキ類の触角に生ずる刺毛について

ミズギワコメツキ類の触角の鋸歯状部(通常は第4-10節)には、表面に生ずる毛とは異った幅広い角状の刺毛が見出される(図の↑印)。この刺毛の位置や外形はほぼ一定していて、節が鋸歯状に拡大する末端の次の節が生ずるやや外側部で、通常2-3本から数本生じている。この刺毛は何かの痕跡であるのか、1種の知覚毛であるのかは現在のところ不明であるが、比較的良好に発達している図Aの場合では、刺毛が輪状に生じており、1種の知覚毛のようにも判断される。



図Aは *Negastrius aino* KISHII エゾチビミズギワコメツキの第7節(×4,000)、図Bは *Migiwa curatus* (CANDÈZE) ミズギワコメツキの第9節(×3,000)、図Cは *Migiwa agilis* (LEWIS) ホツミズギワコメツキの第7節(×2,500)(刺毛の末端が損失している)、図Dは *Migiwa quadrillum* (CANDÈZE) ヨツモンミズギワコメツキの第8節(×2,500)をそれぞれ示した。なお、図Aの右方(↑↑印)と図Dの左方(↑↑印)に生じているのは、次の節の基部である。

また、ミズギワコメツキ類の中でも、この刺毛が見出されない一部の属があり、これの存在の有無は、属間の類縁関係の考察にも用いられると思われる。

(岡崎国立共同研究機構, 大平仁夫)

○八ヶ岳東麓におけるフジコバヤズカミキリの新産地について

八ヶ岳東麓におけるフジコバヤズカミキリ *Mesochistatus fujisanus* HAYASHI の分布は、高桑(1975)*によれば、長野県小海町稲子湯がその南限とされ、より南部に分布するタニグチコバヤズカミキリ *M. taniguchii* SEKI (北限は南牧村板橋牧場付近)との間の分布状況が注目されるとこ

ろであったが、筆者は従来の記録よりさらに南部において、フジコバヤズカミキリを採集しているのでここに報告する。なお、発表にあたって本種の分布状況のご教示ならびに、記録の公表を勧めていただいた神奈川県立博物館の高桑正敏氏に厚くお礼申し上げます。

4♂2♀♀, 長野県南牧村海ノ口別荘地北側(標高約1,550m), 23. ix. 1981.

3♂3♀♀, 同地, 27. ix. 1981.

この場所は千曲川の一支流である高石川の上流にあたり、従来の記録より5.5km南限が下がったことになる。これでタニグチコバヤズカミキリとの距離は約5kmに縮まったわけである。このことから、両種の境界は同じく千曲川の支流にあたる柚添川の流域である可能性が高いと考えられるが、その後何回か調査を行ったが、残念ながら両種とも得ることはできずこの点については説明できなかった。*高桑正敏, 1975. 日本のコバヤズ類の問題点(2). 月刊むし, (55): 9-14.

(神奈川県平塚市, 高橋和弘)

○ルリツツカッコウムシの採集記録

カッコウムシ科の甲虫は一部の種を除き採集しにくい種が多いようであるが、筆者は採集記録を見ることが稀なルリツツカッコウムシ *Tenerus lewisi* LOHDE を山梨県で採集しているので報告する。

1頭, 山梨県北都留郡上野原町, 21. vi. 1987.

薄暗い林内の立枯れの広葉樹の皮を剥いだところ、クモの巣に包まれていた本種(死骸)を発見した。

(東京都世田谷区, 沢田和宏)

○岐阜県御嵩町で *Opanthribus trimaculatus* SENOH (ヒゲナガゾウムシ科) を採集

本種は SENOH (1986)*により、江戸川区荒川河川敷および福岡県田川市で採集された標本に基づいて記載された種で、基準産地以外では和泉(1987)**による太田区多摩川河川敷からの報告がある。筆者は現在までに記録のない中部地方の下記の場所で採集したので報告する。

1頭, 岐阜県可児郡御嵩町大久後(標高約450m), 24. vii. 1987.

本種はいずれも河川敷のアシ原などで採集されているとのことであるが、採集地はモウセンゴケ、ミカワシオガマ、ヌマガヤなどが群生する東濃地方では比較的大きな湿原で、ヌマガヤのスーピングで得られた。

末筆ながら、同定の労をとられ、色々のご教示いただいた妹尾俊男博士に厚くお礼申し上げます。

*SENOH, T. (1986) *Kontyu, Tokyo*, 54: 706-708.

**和泉敦夫. (1987) 甲虫ニュース(78): 8.

(岐阜県博物館, 長谷川道明)

◇ 原稿募集 ◇

新緑の美しい季節となりました。採集調査の好期です。成果は公表し記録にとどめて、貴重な標本を生かしてください。甲虫ニュースは、あなたの成果を生かします。(編集部)

計 報

甲虫談話会の発起人の1人であられた澤田玄正先生が、本年3月14日に不帰の客となられました。誠に痛恨のきわみです。特に先生に親しく接し、長年にわたってご指導・ご鞭達をいただきました私にとって、あの温厚な先生に二度とお会いすることができないかと思うと正に断腸の思いで胸がふさがります。

澤田先生は昭和15年に東京農業大学に奉職されてから昨年3月末日に停年退官されるまで、途中1年間ほどの兵役期間を除いても、46年間の長きにわたって東京農大の昆虫学研究室に在籍されました。この間、研究室で先生のご警咳に接し、多くの薫陶を受けて巣立って行った学生は多数にのぼり、その人数の多さでは日本の大学の昆虫関係機関の中でも群を抜き、先生ほど多数の昆虫研究者を育成された大学教授は恐らく他に例がないのではないかとと思われるほどです。

澤田先生が日本におけるコガネムシ類の分類学的研究に指導的な役割を果たされた1人であることは周知の事実で、その成果として2新属の創設、64の新種・新亜種の記載、さらに2日本末記録種の発見等の業績を残されています。また、1965年にはロンドンで開催されました第12回国際昆虫会議において、幼虫の形態的特徴に基づくヒラタハナムグリグループの系統に関するきわめて独創的な知見を講演されました。このような研究業績から一般的には先生は分類学者と見做されることが多かったのですが、先生ご自身はコガネムシの形態学的分野に最も強い関心を持たれていたようで、常に分類学者としてよりは形態学者として処されることを望んでおられていた様でした。このことは先生の学位論文の標題が「Morphological and Phylogenetical Study on the Larvae



野村健一博士の退官記念パーティにて(1980年4月2日:野村博士(左), 澤田玄正先生(真中), 筆者(右)。

of Pleurostict Lamellicornia in Japan]であることによっても、その思い入れをうかがうことができます。先生は東京農大在職中、大学の種々の役職を兼ねられていたため多忙に明け暮れの日々でしたが、退官後はそれらの雑務から離れすべての時間をご自身の時間として過ごすべく考えられていた様でした。そして未刊だった上記の学位論文の刊行ばかりでなく、特に興味を持たれていた台湾産コガネムシ類に関する新知見等も漸次発表すべく心積りされていた様でした。しかしながら、それを果たす間もなく、あまりに早く幽明境を異にされてしまわれましたことはコガネムシの研究家ばかりでなく、日本の昆虫学にとってもかえすがえすも残念なことです。先生は今、恐らく極楽浄土で沢山の虫達との語り合いを楽しまれていることでしょうか、どうか天界から甲虫談話会をお見守り下さって会員各自の研究の一層の発展をお導き下さいます様お願い申し上げます、心からご冥福を祈り上げる次第です。

(東京農大, 渡辺泰明)

◇ 新刊紹介 ◇

日本の甲虫 その起源と種分化をめぐる

佐藤正孝編 東海大学出版会 2,800円

近年の出版ブームは昆虫界にも波及し、昆虫に関する様々な書籍が出版されるようになった。その中には甲虫にかかわるものも多くみられるようになってきた。これまで情報不足の観があった甲虫界としては、まことに喜ばしい限りである。

ここに紹介する本書もその中の1冊で、たいへん興味深く読むことができたので簡単に紹介しておく。

内容は、日本の甲虫相の成立を分類学、動物地理学、地史学などの関連分野を通して解説しようとするものである。3部からなり、第I・III部は編者である佐藤氏の執筆で、甲虫相成立の背景や地理的分布と種分化などが簡略にまとめられている。が、なんと云っても主体は第II部にあり、第一線で活躍中

の研究者による各論で、それぞれの得意とする甲虫のグループについて、その系統・分類・分布・種分化などをそれぞれの立場から論じている。情報量の比較的多いグループが主になるため、解説されている甲虫のグループには多少の偏りはあるが、いずれも限られた紙面に要領よくまとめ上げられており、研究の現状がよく判り、私のような勉強不足の学徒にはかなり参考になるものである。今後の甲虫類研究の指標ともなり、会員の諸氏にもぜひ一読をお勧めする次第である。

なお、蛇足になるが、本書の執筆者のほぼ全員が本会の会員であることを付け加えておく。

(東京農大, 岡島秀治)

○東京都下のゲンゴロウ科4種の記録

水生昆虫は開発でまっ先に影響をうける。昔たくさんいたという話は星の数ほど聞くが標本はほとんど残っていない場合が多いようである。時既に遅しの感がなきにしもあらずであるが、今のうちに十分な研究材料を揃えておかないと本当にとりかえしのつかない事になると考えていたが、近年水生昆虫、特に甲虫の愛好者が増え、関東地方を中心に少しづつではあるが調査がすすみ種々の面白い報告も見られるようになった。筆者の一人酒井は高等学校の生徒であった頃、東京都八王子市滝山丘陵にあった直径30mほどの池で主にゲンゴロウ科の甲虫を採集したが、その中には近年関東地方ではほとんど報告を聞かない種も含まれているので、少々古い記録ではあるが分布資料として下記に報告しておく。

1. *Graphoderus adamsii* (CLARK) マルガタゲンゴロウ: 1♂, 3. x. 1965.
2. *Hydaticus bowringi* CLARK シマゲンゴロウ: 1♂1♀, 2. x. 1965.
3. *Cybister tripunctatus orientalis* GSCHWENDTNER コガタノゲンゴロウ [写真]: 1♂3♀, 3. x. 1965.



4. *Cybister japonicus* SHARP ゲンゴロウ: 1♀, 3. x. 1965.

これらのうちコガタノゲンゴロウは近年神奈川、千葉、茨城等でかなり熱心に調査を進めているにもかかわらずまだとれたという話を聞いていない。どうもゲンゴロウのように少し深い池などを調査する必要がありそうである。

(東京都大田区、酒井 香; 神奈川県横浜市、秋山 黄洋)

○チビコブカミキリの越冬例

チビコブカミキリ *Miccolamia verrucosa* BATES は、平地から山地にかけて生息し、春から秋にわたって比較的長期間に見られるが、冬期における採集例はないようである。筆者は、東京都高尾山で越冬中の成虫を採集しているので記録しておくたい。

1頭、東京都八王子市高尾山, 3. i. 1988.

この個体は、登山道のわきに倒れていた直径20

cmほどのモミと思われる朽木を崩して採集した。朽木はかなり朽ちた状態で、鍬でように掘り崩すことができ、下面を崩した際に材中に潜む本種を発見したものである。しかし、材の状態からして、これを食材としていたとは考えられず、秋に出現した個体が越冬のために潜入したものと思われる。本種は平地では春季に多数得られるが、山地ではむしろ秋季にしばしば得られているので、成虫越冬の可能性が高いとみてよいだろう。

末尾ながら、当日同行されお世話になった和泉敦夫氏にお礼申し上げる。

(神奈川県横浜市、田尾美野留)

○クニヨシシロオビゾウムシ石垣島からの記録

クニヨシシロオビゾウムシ *Cryptoderma kuniyoshii* MORIMOTO¹⁾ は1978年、西表島産の2♂1♀に基づき記載された。その後、沖縄本島²⁾から記録されたが、石垣島からの記録はないと思われる。筆者は石垣島で採集された本種を保持しているので記録しておくたい。

1頭、沖縄県石垣島オモト岳, 4. v. 1985, 伊藤智採集。

伊藤氏によると、オモト岳の登り口付近の地面を這っていたとのことである。なお、この個体は、原記載や沖縄本島から記載された1♂に比べ、上翅の白帯の幅がやや細くなっている。

末筆ながら、貴重な標本を提供して下さった伊藤智氏に厚くお礼申しあげる。

1) 森本 桂, 1978. *Esakia*, (12): 106-108.

2) 谷角素彦, 1985. 甲虫ニュース, (70): 6-7.

(東京農大、早川浩之)

○腐敗した大豆にきた甲虫

昭和20年(1945)4月、戦時下の福岡でのことである。博多湾で撃沈された輸送船の積荷の中から引上げた、海水に浸た大豆を肥料にしようと九大農学部昆虫学教室前の地面に掘り天日乾燥をしたことがあったが、腐敗が激しく悪臭がひどく閉口した。しかし、注意しているところの腐敗大豆にいろいろな甲虫が出入りしている。以下に列記してみると次のような種類であった。

オオマルマメエンマムシ *Gnathoncus nanntensis* MARSEUL, ルリエンマムシ *Saprinus splendens* (PAYKULL), クロチビエンマムシ *Carcinops pumilio* (ERICHSON), モモトシテムシ *Necrodes nigricornis* HAROLD, オオハネカクシ *Creophilus maxillosus* LINNÉ, アカクビシカムシ *Necrobia ruficollis* (FABRICIUS), アカアシホシカムシ *Necrobia rufipes* (DEGEEB).

エンマムシやハネカクシはすべて腐った大豆に発生した蠅の蛆を捕食しに集まったものであろうが、どうも糞虫類は記憶にない。

(東京都世田谷区、黒沢良彦)

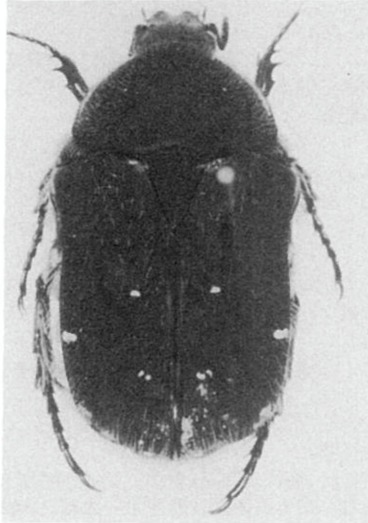
○本州からのオキナワコアオハナムグリの記録

オキナワコアオハナムグリ *Oxycetonia forticula* (JANSON, 1881) は台湾から九州にかけての

島々に分布する甲虫として一般に知られているが、瀬戸内海沿岸地方にも若干ながら分布の様子がみられるので、本州からの採集例を報告しておく。

1頭、岡山県倉敷市鷺羽山, 16. ix. 1979, 筆者採集; 1頭、岡山県備前市八木山, 28. ix. 1980, 筆者採集〔写真〕; 1頭、岡山県倉敷市大室海岸, 15. ix. 1987, 筆者採集 (ハマゴウ群落中の砂中)。

いずれも腹面は緑色ないし緑赤色で白斑を欠く基亜種 subsp. *forticula* の特徴をもっている。なお、近隣では兵庫県淡路島からの記録 (石原 保ほか,



オキナワコアオハナムグリ
岡山県備前市八木山産

1973) がある。

末筆ながら、オキナワコアオハナムグリの同定とご教示を賜った黒沢良彦博士に厚く御礼を申しあげ

る。
参照文献：石原 保ほか (1973). 本州四国連絡架橋に伴う周辺地域の自然環境保全のための調査報告書学術調査編。(岡山県倉敷市, 青野孝昭)

○クロチビタマムシ西日本亜種の本州からの記録

クロチビタマムシ西日本亜種 *Trachys pseudocrobiculata shirozui* Y. KUROSAWA, 1959 は黒沢良彦博士により九州産の標本に基づいて記載された甲虫で、中国湖南省新化県産の標本も、また同亜種の特徴をもつことが、黒沢博士により指摘されている。この度、筆者は本州からも西日本亜種の特徴をもつ個体を採集したので報告する。

1頭、岡山県阿哲郡哲多町奈良ノ木, 25. v. 1987, 筆者採集。

ちなみに、本亜種は上翅の微細な暗色毛の中に少数ながら白毛をもつことにより、それをもたない関東地方や東北地方の基亜種から区別することができる。末筆ながらご教示と同定を賜った黒沢良彦博士に厚く御礼を申しあげ

(岡山県倉敷市, 青野孝昭)

○北大東島より初記録のタマムシ

過日、東京農業大学の菊部治紀氏より同氏が北大東島で得られたリュウキュウヒメヒラタタマムシ *Anthaxia (Haplanthaxia) moyo* CHŪJŌ, 1970 を頂いた。本種は西表島, 石垣島, および沖縄本島から知られていたが、北大東島からは未記録であるので、ここに記録しておく。

1♂, 沖縄県北大東島, 1. v. 1987, 菊部治紀採集。

本種の幼虫はリュウキュウマツの枯材に加害するので、搬入された松材について移入されたものであろう。貴重な標本を恵与された菊部治紀氏に深謝する。
(東京都世田谷区, 黒沢良彦)

○静岡県伊東市におけるスジゲンゴロウの記録

スジゲンゴロウ *Hydaticus satoi* WEWALKA は中根 (1964) によると [*Hydaticus vittatus* (FABRICIUS) の種名で] 本州 (中部以南) 九州, 屋久島, トカラ諸島中之島, 台湾, 朝鮮をへて東南アジア, 印度にわたって広く分布するとされている。最近名古屋女子大の佐藤正孝教授に伺ったところ、名古屋以南では割合普通に見られるとのことである。

最近関東地方を中心に水生甲虫の調査が進んでいるが、少なくとも神奈川, 千葉, 東京, 埼玉, 茨城の諸都県からの報告を筆者は知らない。

先日、東京在住の中村俊彦氏より水生甲虫のご恵与を受けたが、その中に静岡県伊東市で採集された本種を見出した。同氏のお話では市内の橋にあった電燈にシマゲンゴロウ, ハイイロゲンゴロウと共に飛来したものを採集されたとのことである。相当古い記録ではあるが、はたして北限はどこまでのびるのか、現在水生甲虫を調査している一人として非常に興味深いので、同氏の許可を得て報告する。標本をご恵与下さり、発表を許された中村俊彦氏に深謝したい。

1♀ [写真], 静岡県伊東市内, 24. viii. 1959, 中村俊彦採集, 筆者保管。



(神奈川県横浜市, 秋山黄洋)

○日本新記録のオオキノコムシ

日本から新記録となるオオキノコムシの一種 *Aulacochilus episcaphoides* GORHAM, 1883 が奄美大島において採集されているので記録しておく。本種はアッサム、アンダマン諸島、インドシナにひろく分布する美麗種で、ARROW, 1910は The fauna of British India の中で本種を再記載するとともにカラーで図示している。今回、奄美大島において採集された個体はごく僅かな点で記載とは異なるものの、これを別種とするにたる特徴の違いを見いだすことはできなかった。従って当面、日本産のものに対して *A. episcaphoides* の学名をあてておきたい。

アマミオオキノコムシ(新称) *Aulacochilus episcaphoides* GORHAM 1883

1頭, 鹿児島県奄美大島赤土山, 1. vii. 1980, K. YOSHIKAWA 採集。

日本産同属の他種とは以下の特徴によって区別は容易である。すなわち、鞘翅には左右それぞれ2個の赤色斑をそなえ、前方の赤色斑は大きく、基部より中央直前にまで達し、その中央付近には小さな丸い黒斑を備える。後方の赤色斑は先端部よりやや前方に位置し、帯状となり、その前後縁は明らかに波曲するが、側縁および会合部には達しない。

終わりに、本種の調査を筆者に委ねられた木下富夫氏に深謝する。(兵庫県西宮市, 遠山雅夫)

○アオマダラタマムシについての訂正

本誌79/80号(1987, xii)の10頁で、迂闊にも私は本種が「宇都宮のような内陸地方からの記録はない」と記してしましたが、この点について、またまた大野正男教授から、これは誤りで、すでに以下に記すような記録があるとお叱りを受けた。ここに私の不明を深くお詫びして前言を訂正すると共に、併せて重なる大野教授のご厚情に深く御礼を申し上げます。

田中栄一, 1949. アオマダラタマムシ. インセクト, 2(3): 22 (栃木県益子町)。

斉藤良夫, 1978. 埼玉県甲虫. 埼玉県動物誌: 213-258 (埼玉県大宮市島)。

横原 寛, 1986. 栃木県益子町で採集されたアオマダラタマムシ. 昆虫と自然, 21(4): 34-35 (栃木県益子町)。

また、前回の原稿を投稿後に次の記録が現れた。

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭W針も出来ました。その他、採集、製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 東京(3) 21129

電話 (03) 409-6401 (ムシは一番)

FAX (03) 409-6160

(カタログ贈呈) (株) 志賀昆虫普及社

坂口春典, 1987. 阿武隈山地でアオマダラタマムシを採集. 月刊むし, (200): 39 (福島県いわき市江田)。

前回の宇都宮の記録を書く時に、いわき市で採集されたことをすでに知っていた私は、「現在のところ」と断ったうえで宇都宮を「本種の最北分布地と云えるであろう」と記した。しかし、結果的にはいわき市の記録の方が先に出版されたので、私の記録が出版された時点では宇都宮の記録は最北分布地とは云えなくなっていたわけである。私は以前群馬県産の標本を見た記憶があるので、本種は関東一円に広く分布しているように思える。

(東京都世田谷区, 黒沢良彦)

○神奈川県三浦半島におけるルリツヤハダコメツキの採集記録

ルリツヤハダコメツキ *Hemicrepidius (Miwarepseudis) subcyaneus* (MOTSCHULSKY) は、緑色~藍色の強い光沢があるたいへん綺麗なコメツキムシである。関東地域(山梨, 群馬, 長野など)の山地では、比較的容易にみることができ、神奈川県からの記録はほとんどなく、わずかに箱根町仙石と丹沢蛭ヶ岳からの記録があるのに過ぎない(高桑, 1981)。

筆者は、三浦半島富士山で採集された本種を所持しているので、ここに記録しておきたい。

1♂, 神奈川県横須賀市富士山, 13. vi. 1987, 露木繁雄採集。

採集地は、海岸からわずか2km, 標高200mにも満たない所である。これまで、本種は内陸の山地にしか産しないと思われていただけに、今回の採集記録は、本種の生息域を考える上できわめて貴重な資料となるだろう。

末筆ながら、貴重な標本を提供していただいた露木繁雄氏に厚くお礼を申し上げます。

(東京農大, 鈴木 互)

甲虫談話会

会費(一ケ年)3000円, 次号は8月下旬発行予定

投稿〆切は6月末日

発行人 上野俊一

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

電話(364)2311, 振替東京 0-60664

印刷所 創文印刷工業株式会社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥5,000, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,700, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3個以下 ¥1,300, 4個以上 ¥850 (以下同様), 第二地帯 ¥1,500, ¥950, 第三地帯 ¥1,700, ¥1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥60)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25

電話 (03)811-4547, 振替 6-113479